
東方短編集

くらげ。

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方短編集

【Nコード】

N2780I

【作者名】

くらげ。

【あらすじ】

この作品は、8割方筆者の妄想と偏見で書かれております。それでもOkという方はお読みください。

「もしもキャラの二次設定をいじるとどうなるか」のコンセプトのもと、書いております。

場合によっては、キャラが原型をとどめなくなる可能性も…。

「もし〇〇が〇〇だったら。」それだけを考えています。

後、執筆中に聴いていた音楽なども最後に載せたいかと思えます。レビューなんかも最後に書いてくだされば幸いです。

それではお楽しみください。

↳ The other side

この作品は、8割方筆者の妄想と偏見で書かれております。それでもOkという方はお読みください。

「もしもキャラの二次設定をいじるとどうなるか」のコンセプトのもと、書いております。

場合によっては、キャラが原型をとどめなくなる可能性も…。

「もし○○が○○だったら。」それだけを考えています。

後、執筆中に聴いていた音楽なども最後に載せたいかと思えます。レビューなんかも最後に書いてくだされば幸いです。

それではお楽しみください。

もしも魔理沙がもっと女の子っぽくなったら（前書き）

妄想がOver Driveしております。

軽く厨が入ってますので心臓の弱い方や小さいお子様は注意して御覧ください。

もしも魔理沙がもっと女の子っぽくなったら

事の発端は霊夢の一言であつた。

「魔理沙。あなた女らしくないわね。」

「なっ、なんだと！それでも心は純真無垢な乙女だ！」

「ゴメンゴメン。そういう意味で言っただんじゃないのよ。ただ魔理沙と話をしているとなんか男友達と喋ってる様な気分になるかなあ…なんて。」

「はは…そうか…。(畜生、いまのは流石にぐさりときたぜ霊夢。よし、女らしくなってみようじゃないか。)」

翌日

「あら、今日は早いね魔理沙。」

いつものように箒で飛来する流星一筋。

ただ、一つ違ったのは…

「お早う。遊びに来たわよ霊夢。」

「…っ!？」

「何ばーつとしているのよ霊夢。」

「いっついやなんでも…。(ヤバイ、魔理沙がいつもより可愛く見えるわ…。)」それだけではない。

「ちよつと失礼するわ。」「いつもなら来るなりどかどかと傍若無人な振舞いをするのに…今日は清楚と言つ言葉を地で行くようなものである。」

「お茶…飲みますか。」

「あら、お構い無く。」

霊夢はお茶を入れに台所に向かう。早足で

「(やだ…私ったら顔赤くなってる。)」

お茶を縁側に運び、いつもの様に世間話を始める。だが霊夢の心中は穏やかでない。

いつもならあぐらをかいて座り込んで腹を抱えながら豪快に笑う魔理沙であったが、この日は縁側の端にきちんと脚を掛けて座り、何か笑うときは口元を手で押さえ「うふふ」と笑う。

普通の男子、特に筆者の様な女に目が無い人の心を射止めるには十分過ぎるし、下手すれば同性からも好かれるのではないか。

自分の発言が発端だった事は露ほどもしらず、霊夢はこう思うのであった。

（ヤベエ、今日の魔理沙めっちゃ可愛ええ）

結論：凄まじい勢いで魔理沙のキャラが崩壊する（いい意味で）

もしも魔理沙がもっと女の子っぽくなったら（後書き）

次回からは此処に結論をもってきます。
レビューをお待ちします。

もしもチルノが天才だったら（前書き）

おバカキャラの汚名返上…なるかも

もしもチルノが天才だったら

時は紅霧異変

霊夢は、眼下に望む紅魔湖より吹き付ける冷たい風を腋にダイレクトに感じながら進んでいた。

「寒っ！意気がって腋なんか露出するんじゃないかった…。」

思わず神主様の設定にツツコミを入れる。決して筆者が日頃から思っている事ではないのでご了承願いたい。

「ううう。それにしてもこの湖の上に来たあたりから寒くなったわ…。」

その頃、物陰に隠れるは氷の妖精チルノ、密かに霊夢を討つチャンスをつかがっていた。

（ふふふ、かかったわね巫女。あたいの冷氣で体温を下げて鈍らしてから畳み掛けるわ。）

あたいったら最強ね…という言葉を寸での所で飲み込む。

（能ある鷹は爪を隠す…謙虚にいかないかね。）

数分後

「寒い…。」

余りの寒さに暫し飛行を停止し、身を縮こまらせる霊夢。

（今だ！）

その時、物陰から一匹の妖精が巫女に向かって目にも止まらぬ早さで突進した。

「もらったわ！」

勝負を制したのは霊夢であつた。

チルノが突進して来た瞬間、霊夢は持ち前の反射神経と動体視力でかわす。

そして間髪入れずにスペルカード「夢想封印」を叩き込んだ。

いくら天才の頭脳とはいえ、最強のスペルカードを至近距離で食らつては一溜まりもない。

「勝負あつたわね。」

「ぐっ…仕方ないわね。あたいの負けよ。」

もう戦う余力が無いことを悟り、チルノは降参した。「さて、急がなくちゃ。」

こうして静かな氷上の戦いは幕を閉じた。

もしもチルノが天才だったら（後書き）

結論：やはり天才でも主人公に勝つのは無理らしい。

才チを考えるのに10分位かかってしまいました。

感想をお待ちします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2780i/>

東方短編集

2010年10月14日10時28分発行